

## 春を待つ作物

**勿** 来町大高に、毎年エンドウを自家採種により栽培し続けている方がいます。

秋蒔き

のエンドウは、まだ遅霜の心配が残る三月ぐ



らいからぐんぐんと蔓を生長させ、その年一番に畑に新緑をもたらす作物です。四月下旬になると、どんよりと暗い色の種からは想像できない、きれいな赤紫の花を咲かせ、次々と実をつけます。栽培者はそれを味噌汁や煮物に入れて、毎年春の香りを堪能しています。

エンドウは寒さに強く十五℃〜二十℃の冷涼な環境を好みます。これは、初夏に種を蒔く大豆や小豆などと大きく違う点です。

しかし、寒さに強いからと言って、丈夫なまま冬を越せるとは限りません。種蒔きの時期が早すぎたり、肥料が過剰だったり、本格的な寒さが訪れる十二月までに苗が生長しすぎてしまうと、たち

まち寒さにやられ枯れてしまうのです。播種期を見極め、真冬に一〇〜二〇cmの苗丈でとどめることが、エンドウ栽培の第一のポイントです。

そしてもう一つ、毎年欠かさず実践しているのが「しの竹の霜よけ」です。畑のすぐ近くに生えているしの竹の枝を切り取って、エンドウの畝の北側に、ちょうど苗を覆うような角度で立てることで、冬の強く冷たい風をやわらげ、霜が直接エンドウに触れることを防ぐのです。自然の植物を上手に活かしたこの防寒対策は、現在のビニールトンネルや寒冷紗のさきがけとなる先人の知恵です。種や株を受け継ぎ守るということは、同時にその土地や作物に適した栽培方法を一緒に継承することにはかなりません。

「この種だけは切らさず毎年作ってきた」と言う栽培者の思いと「しの竹の霜よけ」に守られて、エンドウはひっそりと春を待ち続けます。

